

（口絵解説）

花の病害虫（21）——ポインセチア——

ポインセチア (*Euphorbia pulcherrima*) は、別名クリスマスフラワーと呼ばれるように、クリスマスの街や部屋を彩る最もポピュラーな鉢花である。

原産はメキシコで、熱帯花木に分類され、高温性で常に日光を必要とする植物であったが、品種改良が進み、半日陰の室内に置いても長く鑑賞できる品種が多く登場し、また苞も赤、白、ピンクなど、色彩もより鮮明になってきたため、人気も高くなっている。

栽培される品種は多数にのぼるが、エッケズポイント”リロ”，V-10の2品種が主流となっている。

1 苞枯病

Alternaria alternata による病害である。

出荷の時期となる11～12月ごろ、展開した苞に発生する。まず、苞に2mm程度の黒点が生じ、のちに拡大して暗褐色、輪紋状の大型不正円形の病斑となる。湿度が高いと病斑上に暗褐色、ビロード状のカビを生じる。病斑は苞の周縁部に多く、発病苞はすぐに落苞する。

発病条件は、15～30℃、多湿条件であり、11～12月ごろ、温室シェード栽培で換気不良の場合に多発生となりやすい。主要品種であるエッケズポイント”リロ”，V-10は本病にやや弱い。伝染源は被害苞の残渣であり、放置した場合周年伝染源となりうる。

防除は、伝染源である被害残渣の除去を徹底するとともに、10月ごろより予防的にポリオキシシンAL乳剤、ベンレート水和剤を交互に2～3回散布する。

2 根腐病

Pythium sp. による病害である。

9～12月、特に10月ごろ、株の生気がなくなり、下葉が黄化して日中ややしおれるようになる。その際に根を観察すると、先端が淡黄褐色に変色し細くなっている。その後、徐々に上位葉まで黄化が進展、株全体が萎ちようし、落葉もする。根はほとんどが黄褐～茶褐色となっている。

発病条件は、24～28℃、多湿条件であり、ピシウム菌であるため土壌水分の過剰が発病及び周辺への伝染拡大を促す。伝染源は土壌や被害株の残根であり、長期間生

存が可能である。

防除は、予防として用土、資材等の消毒を実施するほか、鉢上げ後9月ごろよりオーソサイド水和剤、ダコニール1000の地際部への灌注を行う。発病後はできる限り初期にバンソイル乳剤を灌注し、その7～10日後にリドミル粒剤を株元処理する。

3 タバココナジラミ、オンシツコナジラミ

タバココナジラミ、オンシツコナジラミとも、葉裏に生息する幼虫、蛹、成虫からの分泌物にすす病が発生し問題となる。多寄生した場合には葉の黄化や落葉も生じるが、通常ではそこまで多寄生することはあまりない。しかし、消費者に購入されてからは温暖な室内に置かれるため、わずかでも残った幼虫等がその後増殖し、すす病発生の原因となることもあり、これらの害虫の防除については困難な面もある。

コナジラミ類の発育適温は20～30℃であり、施設内においては4～11月ごろまで多発条件が続く。ただし盛夏の高温は生育に適当ではなく、特にオンシツコナジラミにその傾向が強い。生育期におけるコナジラミ類の寄生は、親株からの持ち込みのほか、盛夏を過ぎ気温の低下とともに施設外からの成虫侵入も大きな要因となっている。

防除は、発生初期から定期的に薬剤散布を行う。防除薬剤は、タバココナジラミの場合、トレボン乳剤、アブロード水和剤などを、オンシツコナジラミの場合、スブラサイド乳剤、同水和剤、アブロード水和剤などを用いる。また、施設外からの成虫侵入を防止するために紫外線カットフィルムの利用も有効であるが、苞の赤の発色が悪くなることもあり、使用する場合には、品種やその他の条件を考慮する必要がある。

4 その他の病害虫

灰色かび病 (*Botrytis cinerea* による) が出荷期の11～12月ごろ、花、苞、葉、茎に発生する。病徴は苞枯病とやや類似するが、本病は病斑上に灰色のかびを発生するため、識別は容易である。

まれにミカンコナカイガラムシが寄生する場合もある。葉裏や新梢に寄生し、コナジラミ類同様、すす病を併発する。

(千葉県病害虫防除所 河名利幸)